

おわりに

私が現在見ることのできる「禍」は以上である。この項を
読んでいる読者がその中のどれだけを「見る」ことができ
るようになったかは私には知ることができない。最後に私
が語るべきは本書を編纂した目的であるかも知れない。
しかしそもそもその目的自体、私にとって何が本当の目
的なのか分からなくなりつつある。

私の目的は君に話したが、あれは嘘だ。その目的は本当
に諦めていた。私がこうやって君と本を作っているのは、君
の孤独を癒したかったからだ。でもそれさえが嘘だった。
私は君を満たしてあげたい。でもそれは君を「私で」満た
したいというだけのことだったんだ。

でももうそれでもいい。君の気が変わっていないければ、私
も君のために生きさせてくれないだろうか。この本は私が
確かにここにいたことを証明するものだ。だからこれを最
後にしたい。そして君の中だけでもう一度、最後まで生き
て、そして君と一緒に終わりたい。

君はきつと一生、満たされることはないだろう。いや、君
はずっとそれでもいいと言っていた。お願いだ。こんな私を
許してくれ、君を愛することを。